

暁の大地
6

成尾
陽

目次

九、人生の目的 ◆ 7

愛善の心 ◆ 7

変わりゆく世の中 ◆ 17

子育て ◆ 26

自然破壊のツケ ◆ 36

皆神山 ◆ 46

石の宮 ◆ 56

ワクチン ◆ 65

梅干しとラッキョウ ◆ 75

宣霊合祀 ◆ 84

黒木鳥居と御杖代 ◆ 94

受けた恩 ◆ 103

この小説は、大本のみ教えをドラマ風に書き下ろしたもので、平成二十二年と二十三年の機関誌「おほもと」と、平成二十四年以降の機関誌「みろくのよ」に連載したもので、登場人物の多くは実在の人物ではありません。

暁の大地
6

九、人生の目的

愛善の心

「おめでどうございます」

大地は実家の玄関のドアを開け、声を掛けた。

「いらつしやうい」

奥から明るい声がし、京子が小走りに現れた。

「ソウ君、よく来たね、おめでどう。寒かったでしょ」

大地の手をしっかりと握って、恥ずかしそうにはにかんでいるのは、二歳になった大地の長男・蒼汰朗、つまり京子の孫である。

「お母さん、あけましておめでどうございます」

「おめでどうございます、芳さん。また降ってきたみたいね。さあ、上がって」

「はい、おじゃまします。少し積もりそうですね。蒼汰朗、長靴を脱いで」

芳の声で蒼汰朗は玄関に腰掛けて上手に長靴を脱ぎ、腹ばいになって靴を直した。

「お、たいしたものだ。偉いな蒼汰朗は」

遅れて出てきた大地の父・剛が、孫の頭をなでた。

「お父さん、おめでとうございます」

芳が笑顔であいさつした。

芳は雨宮家に嫁いで四回目の正月を迎えていた。大地と結婚したのが平成二十九年六月、一年後に蒼汰朗を授かった。令和三年の新年で二歳半になった蒼汰朗は、目がクリツとした端正な顔立ちで、ようやく片言の単語で会話らしいことができるようになりつつあった。かわいい盛りである。

「はい、おめでとうございます。それにしても芳さんの躰しづけがいいんだな、この年で靴をそろえられるとはね」

「いえ、気まぐれで、いつもできるわけじゃないですよ」

芳がうれしそうに言うと、蒼汰朗は立ち上がって京子の手をつかみ、催促するように奥へ向かって行った。

今年の正月は、雨宮家全員で顔をそろえることができず、新型コロナウイルスの影

響がここにも及んでいた。

師走に入り、第三波の感染拡大が広がり、東京で美容師として働く大地の妹・ちあきも両親を気遣い、長野への帰省を断念した。

“早く会いたいけん、今は帰らんでいいけんね”

帰省を迷っていたちあきは、このフレーズをテレビニュースで知り、温かみのある表現に共感し、正月休みは東京に残ることにしたのだった。

この言葉は、島根県の広聴広報課がゴールデンウィークに向け企画し、昨年四月末に山陰中央新報に掲載した新聞広告で、「第四十回新聞広告賞」に選ばれた出雲弁のコピーである。そこには“県外に住むあなたが大切だと想うひとに、どうかそんな言葉をかけて欲しい。そのひとを守るために今は会わないことにしませんか。…近いうちに、いつも通り会える日が必ず来ます”とメッセージが添えられていた。

…なるほどなあ、と思ったちあきは、父の「心配ない、大丈夫だから帰ってこいよ」とのLINEメッセージに、“高齢者二人のためだからね”と返信していた。

「高齢者って七十歳以上じゃないのか？俺はまだそんな年じゃないぞ」

剛は、ちあきが帰省しない理由を大地に愚痴った。

「まあ、お父さんも去年選暦で会社を定年になったし、もう孫もいるおじいさんだから、そろそろあらがわないようにした方がいいかもね」

大地が言った。

「こんなかわいい孫がいるんだから、そうなんだろうけど、なんだかな〜」

「お父さんは認めたくないもんね。私はまだ選暦まで数年あるから、当然高齢者じゃないわよ。でも、蒼汰朗に“バアバ”って呼ばれるとうれしいけどね」

京子が笑いながら言った。

「まあまあ、新年早々、年の話ばかりじゃつまらないから…。さあ、乾杯しよう」

剛が話を変えた。

「では、あらためて。新年、あけましておめでとうございます」

剛の発声に、それぞれが「おめでとうございます」と唱和した。

「おめでと…」

蒼汰朗のはにかんだ声も聞こえ、笑いが起こった。

「すごい、おめでとう…って言えるんだ」

大地の弟・司が驚いた様子で言った。

幼子が一人いるだけで、その場の雰囲気が大きく変わる。まさに天使のような存在である。「主役」の蒼汰朗を中心に、兩宮家の居間はにぎやかな新年会となった。

両親と弟、妻と長男。妹がこの席にいないのは残念だが、大地は家族六人が元気で新年を迎えられたことを、心からありがたいと感じ、おのずと笑顔になった。

「綾部のおじいちゃんとおばあちゃんも元気だったよ」

大地は今朝、祖父母の梅木松太郎とともに電話をし、新年のあいさつを交わしたことを報告した。

「あら、そう。私、まだ連絡してないわ。またあとで電話しないとね。」

「そういえば芳さん、亀岡の天恩郷は、麒麟きりんがくる」の大河効果で、参観者が増えているそうね」

「そうらしいですね。うちの両親も先月お参りに行ったようですが、ちょうど日曜日で、大勢の人でにぎわっていて、びっくりしていました」

芳が自身の実家を通しての情報を伝えた。

「コロナの影響で、放送が一時中断したけど、今回の大河ドラマはなかなか面白いな」

剛が言った。

「その分、期間も延長するらしいね。確か二月七日まで延びるそうだよ。大河ドラマは放送が終了してからも、「大河ロス」とか言って、しばらくゆかりの地は観光客にぎわうらしいね。だから、本能寺の変の起点になった亀山城址じょうしの大本は、これから春にかけて人が多くなるんじゃないかな」

大地は、光秀時代の石垣の一部が残る天恩郷の神苑風景を思い浮かべていた。

「反逆者、謀反人と言われ続けた明智光秀が、今回は英雄のように描かれているのが斬新だね。十一月ごろの放送だったか、比叡山焼き討ちの前後、特に天台座主ざすの覚かく恕じよの悪役ぶりが秀逸だったな。それに今回の大河は、信長や正親町おほぎまち天皇、摂津晴門せつづはるかどや松永久秀、最初のころだったら斎藤道三とか、脇役がそうそうたる顔ぶれで、見応えがあるよね」

「司は、やけに詳しいな」

大地が感心した。

「それにしても、天台座主ざすや僧侶をあんなふうふうに悪役で描かれたら、延暦寺の人たちは嫌だろかね。私、ちよつと心配しちゃうわ」

「そうだよね」

大地も同調した。

「俺も思ったな。ひよっとしたら、比叡山がNHKに抗議を入れるんじゃないかと心配になったね」

剛が相槌を打った。

「それが違うんだよ。何かの記事で読んだんだけど、天台宗の役員の人のコメントが紹介されていてね。正確には憶おぼえていないけど、大河ドラマの比叡山焼き討ちの描写に関しては、あくまでもドラマなので、比叡山としては、怨親平等おんしんびやうどうの思想から、いちいちコメントはしませんと書いてあったんだよね」

大地が説明した。

「おんしんびやうどう?」

司が訊いた。

「怨親平等おんしんびやうどうっていうのは、恨み敵対した者も、親しい味方も、分け隔てなく同じように扱うってことらしいね」

「なるほど、中東紛争のように、報復の連鎖はしないということか」

「それに比叡山延暦寺では毎年、信長による焼き討ちの犠牲者を供養する法要を行っ

ていて、その法要の鎮魂塚には信長の遺品も納めてあつて、敵味方同じように追悼しているそうだよ」

「さすが天台宗だ、懐が深いな」

剛が頷きながら言った。

「もう一つ、感心したことがあつてね」

大地は真面目な顔になつた。

「毎年、延暦寺のお坊さんたちが托鉢たくはつをするでしょ」

「ああ、寒行托鉢たくはつだな」

「そうそれ、年末にお坊さんたちが比叡山から町へ下りて、寒い中を托鉢たくはつに歩いて、お布施を集めるんだよね。でね、去年はその浄財の一部を、NHKの歳末たすけあいたすけあいに寄付したそうだよ」

「えつ、NHKに…。やるね」

剛の声が大きくなつた。

「でも、大本にも同じような考え方がありますよね、お母さん」

芳が京子に言った。

「えっ、そう、そうね、あつたよね」

「確か、讚美歌の中にあつたな」

大地が助け舟を出した。

「責めらるる苦しき身にも虐ぐる

仇を愛する心たまはれ

「怨親平等おんしんびようどうつていう言葉を聞いた時に、僕はこのお歌が浮かんできたなあ」

「仇を愛する心か…、なかなかできることじゃないけどな」

剛が腕を組んだ。

すると京子も思い出したように短歌を口ずさんだ。

「そういえば、

睨まれてにらみかへすは人ごころ

笑ふてかへすは神心なる

という聖師さまのお歌もあつたわ」

「そのお歌、ステキですよね」

「でも、自分がそんなふうに見えるかどうかは別だけどね」

京子は芳と目を合わせてから、剛の方に目をやった。

剛は、笑って返されたらかえって怖いぞお……と言わんばかりに、肩をすくめた。

「見直し聞き直し……、大本も天台宗も、要は『愛善の心』だよ。お正月だし、めでたし、めでたし……、としようね」

「フツ、お兄ちゃん、うまくまとめたね」

司がちゃかすように言った。

変わりゆく世の中

「そろそろ時間かな」

そう言って司がリビングを出て行き、程なくパソコンを持って戻ってきた。そのままテレビの前で何やら操作して、パソコンを設置した。

「では、今からオンライン新年会を始めます」

「おっ、ちあきが参加するのかな？」

大地が訊いた。

「そうそう。今、Zoomで招待しているから、しばらく待って」

「それにしても、去年のコロナ禍から急速にネットを使うことが増えたよな。司もリモートワークが増えたって？」

「そうなんだよ。うちの銀行でも出勤は二日に一回のペースになってきて、働き方も一変したね」

司は大学卒業後、長野市内の地方銀行に勤務。営業担当で、お客さまとの接し方に、苦慮しているという。

「リモートワークもいろいろ制約があるし、お客さんも年配の人が多から、ネット

だけに頼るわけにもいかず、何かと難しいね」

「司はいろいろ大変みたいね。でも、私は良いこともあったわよ。おかげで聖地での大祭や月次祭がライブ中継されて、自宅からお参りできるようになったしね。ありがたいわよ」

京子がうれしそうに言った。

「そうですね、お母さん。ネットを通じてお参りできるようになるなんて、一年前までは考えてもいませんでした。土曜の夜の『新型コロナウイルス終息オンライン一斉祈願』も、全国の人たちと一緒にお参りできるようになりましたね」

「そうよね。私もスマホを通してご祈願させていただいているけど、あの一斉祈願には、何人くらい参加しているのかしらね？」

「年末に本部の知り合いに聞いたんですが、大体毎回、百アカウント前後らしいですね。でも昨年の最後、直心会が担当の時には、三百くらいになったそうですよ」

「え、さすが直心会だわ」

「お母さんも、ユーチューブやSNSができるようになったんだね？」

大地が訊いた。

「まあ、何とかお父さんに教えてもらいながらね。お父さんが、ユーチューブの大本公式チャンネルを登録してくれたしね」

「えっ、そうなの？」

大地が驚いたように言った。

「そんなに驚くことでもないだろう。まあ、成り行きでね」

京子の夫・剛は、大本信徒ではないものの、大本については理解を示していて、何かと京子に協力してくれている。

「チャンネル登録者も増えているよな。確か暮れには二万を超えていたんじゃないかな」

剛が言った。

「そうだよ。もう二万一千になっていたね。そのほとんど、二万人くらいが一般の人らしいよ」

「ほく、そりやすごいな。たいしたもんだ。確かにコンテンツの数もそこそこあるし、中身の質は高いと思うな」

「そうですよね。特に聖師さま・出口王仁三郎のネームバリューは高いので、関連動

画から大本の映像を見にくる人が多いんですって。それと霊界、目に見えない世界のことについて知りたい人が増えているような感じですね」

芳かむるが答えた。

「こういう先の見えない時代だから、死後の世界に興味を持つ人が増えているんだらうな」

「そうだね。霊界を紹介した『この世の向こうに』というアニメは、一年前まではアクセス数一万くらいだったのに、コロナ禍で一気が増えて、もう八十二万回を超えているもんね」

大地は登録者数の急増に驚いていた。

「パソコンとかに疎うとい私の両親ですら、最近はずタブレットを使い始めて、ユーチューブの動画を見るようになったんですから、時代は進みましたね。それとLINEのビデオ通話で蒼汰朗そうたろうの様子が見られるのが楽しみようです。必要に迫られると、人間、できるものですね」

芳もネットを通じて両親に孫の姿を送れることがうれしく、こんな世の中にあつて、新しい手段を使い、環境に順応することも神さまのお恵みだと感じていた。

「大本讃美歌の中のお歌に、今の私の心境にぴったりだなと思ったのがあったんですよ。」

変はりゆく世に生まれ来て皇神の

恵みにひたるは嬉しからずや

（大本讃美歌第一〇二）

というお歌なんです」

「本当に今は、変わりゆく世の中だわね。でも、芳さんのように何事もプラスに捉えていけないとね」

「はっ」

芳は京子に共感してもらい、うれしそうに返事した。

「おつ、お姉ちゃんが入ってきた」

司がパソコンを操作した。

「あけましておめでとうございます」

テレビ画面の向こうのちあきが笑顔であいさつした。

「おめでとうございます」

兩宮家の全員が、声を合わせるように応えた。

「みんな元気？ あ、芳さんお久しぶりです」

「お久しぶりです。ちあきちゃんも元気？」

「はい、めっちゃめちゃ元気。年末が忙しかったんで、今朝はゆっくり寝てました」

「お客さん、多かったですか？」

「コロナがはやりだしたころは、足が遠のいたけどね。でも、みんな髪は伸びるから、徐々に戻ってきたの。それに多くの常連さんは来てくださったんで、ありがたかったわ」

「そりゃ、良かったな」

剛が安心したように言った。

「ホント、美容室つてお客さんと密になるし、仕事が減るのかと心配していたからね。良かった、良かった」

京子もテレビ画面のちあきに向かって言った。

「確かにそうよね。寒い間はコロナも減りそうにないから、あつたかくなったら帰ってらっしゃいね。みんなちあきにカットしてもらおうのを待っているから」

「そうだね、春になったら一度帰れるかな」

ネットを使つての画面越しでのやり取りだが、互いがそばにいるかのように、スムー

ズに会話ができる。しかもほとんど費用はかからない。便利な世の中になったものがある。

蒼汰朗そうたろうが興味深げにテレビに向かって歩み寄った。

「あつ、ソウタロウ」

ちあきが手を振った。

「ほら、ちあきおばちゃんだよ」

「違う、チーねえちゃんだからね」

ちあきが、大地の呼び掛けに反論した。

「蒼汰朗、ほら」

芳が何かしゃべるように蒼汰朗に耳打ちすると、蒼汰朗は恥ずかしそうに小さな声で、おめでどう…と言った。

「うわ、すごい、もうしゃべれるんだ、おめでどうソウ君。アツ、そのトーマス気に入ったかな？」

ちあきがクリスマスプレゼントで贈ったおもちゃの機関車を、蒼汰朗はしっかり握りしめていた。

「すつごく気に入ったみたいで、毎日これで遊んでるのよ」

「ほんと、良かった。ありがとうね、ソウ君」

画面のちあきを含め、兩宮家全員での新年会はにぎやかに進み、話に花が咲いた。

「そうだ、大地たちも人型を書いておいてね」

「了解、また書いて持ってくるね」

大地が言った。

「お母さん、私の分は書いておいてね」

ちあきが画面から話し掛けてきた。

「あと、アパートと自転車もお願ひ。いつもなら人型に書いてから体を撫なでるんだけど、今年は無理だね」

「その分、お母さんが真心込めてしつかり書かせてもらうからね」

「お願ひします」

二人の会話を聞いた芳が、あの…と京子に訊きいた。

「人型で体を撫なでるんですか？」

「いえ、別に撫なでなくともいいんだけどね。今回のちあきのように代筆でもいいわ

けだから、必ずそうしなさいということじゃないのよ、芳さん」

「そうなんですわね」

「私は子供のころから、父に言われていたことを習慣でしていたものだから…」

「どんなふうにな？」

「人型に息を吹きかけて全身を撫でていたのよ。時には一晩、枕の下に敷いていたこともあったの。それをうちの子供たちが小さいころからさせていたので、一年に一回のことだけど習慣のようになっていたのね。特に頭は念入りに撫でて、賢くなりますように…ってね」

「そうなんですわ、じゃあ、今年は私もそうしてみます。蒼汰朗にも」

「そうね、それがいいわね」

「でも、コロナ禍の今だからこそ、大祓はらいって大切ですね」

「本当にそうだと思うわ。疫病退散…、大難を小難に、小難を無難に…。節分にはしっかりとお祓はらいしていただきましょうね」

「そうだ、芳は、人型用紙の中に書いてあるマークは何か分かるかな？」

大地が芳に質問した。

「あの象形文字のようなもの。そういえば、何かなど思ったことはあつたけど、意識してなかったかも」

「あれはね、修祓の二文字をつなげて書いてあるんだよ」

「へえ、そうなんだ」

二人の会話を耳にし、京子が近くに置いていた人型用紙を芳に手渡した。

「あつ、ホントだ。何となく分かる」

「芳さん、それ、私の受け売りよ」

「なんだ、そうなの」

芳の反応に、大地は苦笑いした。

子育て

「人型用紙の 修祓しゅうぼつ マークもそうだけど、人間って見慣れすぎてしまうと、気にも留めていないことって多いものだよね。同じように、当たり前のことが、本当は当たり前じゃない、ありがたいことなんだということを、つい忘れてしまっているなあ。今のコロナ禍で、みんながそのことを感じるようになったんじゃないかな」

剛がしみじみと言った。

「そうですね。本当なら、今ここにちあきちゃんがいるのが当たり前ですものね」
芳かおるが言った。

「そうそう、私もそう思う。いつもなら、そこでみんなとおせちを食べているはずだもん」
画面の向こうからちあきが発言した。

「でもね、こんな状況だから、忘れていたことに気付かされることもあるのよね」
「えっ、何？」

「先月の二十日ごろだったかな、職場から帰る電車の中で高校生の男の子たちの会話が耳に入ってきたのよね。その子、いつもならお正月は離れて暮らすおじいちゃん、おばあちゃんのところに行くはずで、楽しみにしていたよね。もちろんお年玉をもらえるっ

てこともあるようだったけど。でも、今年はコロナで東京からは行けないって言うの」

「ちあきちゃんと同じね」

「で、その子偉いのよ。今まで書いたことなかったけど、今年初めておじいちゃん、おばあちゃん宛てに年賀状を書いたんだって。うちみたいにオンラインはできないから、せめて年賀状くらいはって。ね、イイ話でしょ。私、その会話を聞きながら、コロナでつらいことも多いけど、良いこともあるんだなって思ったわけ」

「へえ、孫から年賀状を受け取ったおじいさんとおばあさんは、今頃きつと喜んでいるでしょうね」

芳がちあきの話に頷きながら応えた。

「そうだ、うちも届いているかな？」

おせち料理の里芋を頬張っていた司は、箸を置いて席を立ち、ほどなく戻ってきた。

「また雪が降ってきたよ」

そう言いながら司は年賀状の束を剛に渡した。

「お父さん、うちの年賀状は蒼汰朗の写真だからね」

大地がすかさず言った。

「おつ、そうか、じゃあそれだけ見せてもらおうかな」
剛は年賀状をめくった。

「あつた、あつた。こりゃかわいいな、ほら」

剛は相好を崩しながら、京子に手渡した。

「あらホント、良い写真」

「かわいいね、蒼汰朗」

司が京子の手元をのぞき込んだ。

「私にも見せてよ」

画面のちあきがじれったそうに言った。

「はいはい」

司が年賀状を受け取り、パソコンのカメラに向けた。

「ホント、良い写真だね」

「ちあきにも送ったはずだよね、芳」

「はい、送りましたよ」

「たぶんまだ届いていないと思うから、楽しみ」

「ほら、誰だ？」

司が年賀状の写真を蒼汰朗に見せた。それが自分だと分かったのか、蒼汰朗は写真を指さして恥ずかしそうにした。そのしぐさが愛らしく、みんなの笑い声がリビングに広がった。終日、雨宮家には和やかな時が流れた。

三月、北アルプスの山々には雪が残り、平地の梅のつぼみもまだ堅い。それでも確かに春は近づいている。

大地は結婚後、実家から出て長野市内で芳との新居を持った。取りあえずアパートを借り、新生活をスタートした。

東川芳との最初の出会いは六年前、聖地での大道場修行だった。当時大地が二十八歳、芳が二十五歳。その時は、互いに相手を意識してはいなかったが、その後、大祭参拜などで聖地で会う機会が重なり、次第に互いが気になる存在になっていった。

電話やLINEでの交流はもとより、長野と静岡というそう遠くない距離も幸いし、たびたび会う機会を作った。一年ほどの間に二人の仲は深まり、二年足らずでのゴールインとなった。

大本の信仰家庭で育った芳だったが、大地同様、青年部活動に積極的に参加していたわけでもなく、信徒籍もなかった。しかし、大道場修行での出会いであったことから、神さまがご縁を結んでくださったのだと感じていた。大地も同じ気持ちだった。

二人の間では、大本のことをはじめ共通の話題も多く、次第に互いの価値観が近いことを感じていた。何より一緒にいて心地よかった。

結婚の前に二人はそろって大本に入信し、天恩郷・万祥殿で華燭かしよの典を挙げた。これには大地の母・京子、そして何より綾部の祖父母が大層喜んでくれた。

芳の両親、それに大地の祖父・松太郎の勧めもあって、自宅にはご神号幅を奉斎することになり、新婚生活のスタートとともに、信仰生活も始まった。

まずは、朝夕拜の励行。一日の始まりに二人そろって神さまに手を合わせて、夕食前に一日の感謝をささげる。大地は、自分一人だと長続きしないかも…と思ったが、芳と二人だと意外と続けられた。

しばらくするとニューフェイスが加わり、家族三人での楽しい日々が続いた。仕事で嫌なことがあっても、蒼汰朗の笑顔を見ると疲れも吹っ飛び、癒やされている自分があった。子供の力はスゴイ！と実感する。蒼汰朗のおかげで親となり、自身の両親に対する気持ちにも変化を感じるようになった。

芳は実家のある静岡で蒼汰朗を出産し、長野に帰ってからは、子育てに専念している。初体験で分からないことばかりだったが、何か悩みがあると京子に相談することがしばしばであった。

「子供が三歳までは、楽しいことばかりよ」

ある時、京子は『寸葉集』を手に、三代教主さまのお示しを紹介してくれた。

母（二代教主）は、こんなことを言っていました。

「わたしは子どもに孝行などしてもらおうとも思うとりません。子どもの小さい時に、子どもを育てることで充分楽しませてもらいましたので」と。

乳児が知恵つきつつ成長してゆく課程の愛らしさ、そして大人になってゆく美しさ、おもしろさを、母は大きな愛情をもってよく見、よく味わいつつ、苦しみもまた楽しみとして育ててきたことだけで充ち足りていたのでしょうか。

母のこの言葉のもつ深い含蓄と、ただならぬ偉大さに頭のさがる思いがいたします。

「芳さん、今はしっかりと子育てを楽しむのよ。小さいうちはね、ちょうど子供に『楽し

みや喜び」という借金をしているようなものだからね。子供が大きくなるにつれて何らかの苦勞は必ずあると思うけど、その時は、その借金を返済していると思えばいいのよ。それに時々、ボーナスもあるしね。私にとって、あなたたちの結婚は大きなボーナスだったわ」

芳は京子のアドバイスに助けられ、気持ちが出来になったこともたびたびであった。

♪ピンポン

インターホンのチャイムが鳴った。蒼汰朗が反応して、真っ先に玄関へ向かってちょこちょこ走った。

「蒼汰朗、誰かな？」

後から付いて来た芳が玄関のドアを開けた。

「やー、蒼汰朗、こんにちは」

蒼汰朗は素早く芳の後ろへ回り、芳の陰から司の顔をじつと見た。

「あら、恥ずかしいの。ほら、司おじさんよ」

「だから、芳姉さん、おじさんじゃなくて、司兄さんと教え込まないとダメだよ。でも、マスクしているから分からないかな」

司は、おじさんと呼ばれることに妙に抵抗していた。

「これ、野沢菜」

「ありがとう、うれしい」

京子から頼まれて、司が自家製の野沢菜漬けを届けに来たのだった。

「で、これは…」

とポケットから小さな車のおもちゃを取り出し、しゃがんで蒼汰朗の目の前に差し出した。蒼汰朗は急に笑顔になり、車をつかんだ。

「あら、もらったらどうするの」

蒼汰朗はニコニコしながら、小さく頭を下げた。そのしぐさがかわいく、司は蒼汰朗の頭をなでた。

「どうぞ、上がって」

「はい、お邪魔します」

司が奥へ進んだ。

「司、いらっしやい」

大地が顔を出した。

「野沢菜を届けていただいたの」

「そっか、ありがとう。ま、どうぞ」

大地がリビングに誘い入れた。

「ここへ来たの、半年ぶりかな？」

司がコートを脱ぎながら言った。部屋にはコーヒーの香ばしい香りが立ち込めている。

「えっ、そんなになるかな」

「去年の秋以来だと思っよ」

「コロナで会う機会も少なくなったからな」

「それもあるよね」

二人は芳が入れたコーヒーを飲みながら、兄弟で近況を語り合った。すぐそばでは蒼汰朗がお気に入りの機関車のおもちゃと、さつきもらった車で楽しそうに遊んでいる。

「そうそう、夕べね、すごく面白いというか、興味深い映画を見たんだけど、お兄ちゃんは何知ってるかな？」

「ん、何ていう映画？」

大地が訝しげに訊いた。

自然破壊のツケ

「『コンティジョン』というアメリカ映画なんだけどね」

「コンティジョン？」

大地が司に聞き返した。

「まるで今の新型コロナウィルスの感染拡大を予言したような映画で、しかも十年前に制作されているんだ」

「へえ、そんな映画があつたのか。もう一昔前になるけど、日本にも国内で未知のウィルスがまん延したストーリーの『感染列島』という映画があつたな。確か英語版のタイトルが『パンデミック』。僕も半年くらい前にネット動画で見て、今のコロナ禍を思わせる現実味があつて、びつくりしたことがあつただけどね」

「それ、僕も見たよ」

「なんだ、そうか」

「でも、コンティジョンは、もつとリアルに今の世界の感染の様子を連想させる…と
いうか、そのまんまという印象なんだよ。マット・デイモンが主演で、ジュード・ロ
ウや大勢のハリウッドスターが出演していてね。新種のウィルス感染が目を追って世

界中に拡大していく恐怖が、とにかく現実味を帯びて伝わってくるんだ。日本での感染の場面もあつて見応えあつたよ」

司が真剣な表情で話を続けた。

「司、タイトルの『コンテイジョン』の意味は？」

大地がコーヒーを飲みながら訊きいた。

「確か、伝染」

「そうか、面白そうだな。僕も見てみようか」

「見ておいて損はない、お薦めの映画だよ。当初アメリカでは、『せっかく豪華なスターを集めたのに地味すぎる』とか『単調で飽きた』なんていうレビューも多かつたようだけど、今は大注目されて、『リアリティーがありすぎて怖くなつた』という評判で、僕も見ていて怖いくらいだったよ」

司が顔をしかめた。

「この手のハリウッド映画にありがちなアクションやラブシーンはないんだけど、ストーリーがよく考えられていて、パンデミックの二日目から、淡々と時系列に追って

いるんだ。この二日目から始まるのがミソだね。日を追って、いくつかの視点で感染の進行状況を描いているんだ」

「その一つに日本でのシーンもあるわけだな」

「そうそう、日本では路線バスの中で感染者が発症するという想定だったね。実際の新型コロナウイルスよりもかなり速い感染スピードだけだね」

「そうなのか」

「映画の最初は、マット・デイモンの奥さんが感染して死んでしまい、追い打ちをかけるように小学生の息子も亡くなってしまふ。でも、父親と娘にはたまたま免疫があったのか、感染しないんだよ。それとか、患者の対応に追われる医師が感染したり、防護服を着た作業員がゴーストタウン化した市街地を消毒するシーン、無人の量販店で品物を略奪する暴徒化した住民なんかの場面は、去年世界のあちこちで報道された光景と同じだ…と思ったな」

司が詳しく映画の内容を語った。

「あら、二人とも真剣な顔ね」

芳^{かおる}がお茶とお菓子^{かおる}を運んできた。

「面白い映画の話ですよ」

「ちよつと聞こえていたけど、なんだか怖そうね」

「ホラー映画じゃないですよ、でも違う意味で怖いんです」

「私、怖いのが苦手」

「芳は怖がりだから見なくていいよ」

「あら、大地君は見るつもりなの」

「たぶん……」

大地が小声で言った。

「じゃあ、一緒に見よっかな」

そう言いながら芳は、お茶とお菓子を司の前に置いた。皿に盛られた三色団子を目ざとく見つけた蒼汰朗が、おもちゃを置いて近づいて来た。

「これはダメよ。蒼汰朗は、こっちなね」

芳が小さく切ったバナナをテーブルに置くと、蒼汰朗はすかさず口に頬張った。

「ん、このお茶は、えんめい茶かな？」

司が湯飲みを持ったまま訊いた。

「さすが、司君。よく分かったわね」

芳が感心して言った。

「これ山野草のお茶で、カフェインが入ってないから、蒼汰朗にもいいよね」

「そうなの。お母さんから教えてもらって、蒼汰朗も時々飲んでるのよ」

「そうだったんだ」

司は、出された三色団子の串を持ち、一つかじった。

「ねえ司君、三色団子は『飽きない団子』だって知ってる？」

芳が訊いた。

「飽きない、ですか？ いや知らないです。おいしくって飽きないっていうことですか？」

「ハズレ」

「え〜」

「どうしてか、知りたい？」

「はい」

「芳、じらすなあ…」

大地が笑いながら言った。

「実はこの団子の色が由来なのよ」

芳が団子を指さした。

「色？」

「このピンクは桜色で春を表し、白は雪で冬を表すんだって。で、緑色は新緑で夏。ということとは？」

「春・夏・冬か、ということとは、秋がないですね」

「そう、秋がないから……」

司が頭をひねった。

「そっか、“秋がない”から、あき・ない、“飽きない”ですか」

「正解！」

「なんだ、ダジャレじゃないですか」

「まあ、そんなところね。でも、飽きないは商売の“商い”にもつながるから、それこそ縁起が良いのかもね」

それを聞いて大地が話を割り込んできた。

「ついでに言うと、入り口に、“春夏冬^{なか}中”という札を出している店があるんだけど、これはどういう意味でしょう？」

司が腕を組み、しばらくして答えた。

「分かった、秋なない中だから、〃商ちゆうい中〃」

「ご名答。営業中ってことだな」

「なるほど、勉強になりました。では、冬と夏を頂こうかな」

司は団子を食べ終わって、映画の続きを話し始めた。

「コンテイジョンでは、感染の恐怖と戦う難しさ、偽情報によるパニック、都市封鎖、医療崩壊、ワクチンの入手争いといった場面が続くんだ。グローバル化で世界が狭くなったことも伝わってきたよ。この映画を見てから今の世の中を見ると、現実がまるで映画の続編かと思えるくらいなんだ」

「なるほどね。グローバル化の流れは止まらないよな。二十年ほど前にSARSがアジアやカナダを中心に感染拡大したけど、幸いにも日本には入ってこなかった。MERSもヨーロッパでは広がったけど、日本は大丈夫だったんだ。でもそれ以降、世界は急速にグローバル化が進んで、今は国境を越えるのもアツと言う間で、今回の新型コロナウィルスは瞬く間に、全世界に広がったわけだからな」

大地が真剣な表情で言った。

「そうだね。それにしてもこの映画を十年も前に制作していたことに驚いたな。当時、なぜ日本であまり話題にならなかったのかと思ったら、日本は東日本大震災の渦中だったからみたいだね」

そう言って司はしばらく考えてから、話を続けた。

「どうでしょうか、映画のラストは、これから見るお兄ちゃんには言わない方がいいかな？」

司がわざと独り言のように言った。

「いいよ、ここまで詳しく解説してくれているし、どうせしゃべりたいんだろ。僕もいつ見られるか分からないしね」

大地が見透かしたように言った。

「バレた？」

司は、じゃあと言ってお茶で口を潤した。

「憎いのが映画のラストなんだ。ストーリーがパンデミックの二日目から始まっているって言ったでしょ。で、最後に感染の一日目、パンデミックの原因が映し出されるんだ」

「なるほど」

「感染の始まりは武漢じゃなくて、香港っていう設定なんだけど、ウイルスの由来は、なんとコウモリで、家畜の豚にウイルスが運ばれ、その豚を通して人間に感染するという起源だったんだ。でもね、そのシーンを見て、「エッ、こんなことから」って思ったんだ。日常のささいな出来事が、ウイルスの発生源なのかと思うと、正直ゾッとしたな」

「へえ、そうなのか。確か、「感染列島」も似たような想定じゃなかったかな。南洋のどこかのジャングルのコウモリだったような気がするな。結局、人間が経済優先で森林を伐採し続けていったツケが回ってきたということだよ。経済繁栄の裏側では、大きな犠牲が払われている」

「そうだね、二つの映画の内容は、人間のエゴや欲望、自然破壊への警鐘ということだね。でも、僕ら自身の問題でもあるな」

天井を見上げながら、司は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「大本の聖師さまは、

大三災小三災の頻発も

人のこころの反映なりけり

というお歌を詠んでおられるんだけど、僕は最初、あまりピンと来なかったんだ。でも、今回のコロナ禍で理解できるようになった気がする。感染症は小三災の飢病戦の病に当たるだろ。自然破壊も経済優先も、利便性や金品を求める人間の心にあると思うと、このお歌の意味がストーンとおなかに入った気がしたんだ」

「確かに、そういうことだね」

司が同調した。

「人類の行き過ぎた開発が、自然の奥に潜んでいたウイルスとの接点を生んで、それが今のコロナ危機につながったのかもしれないなあ。だから、今のうちに過ちに気付いて、根本的な反省に立たないと、この子らの未来が心配になってくるよ」

大地は、傍らで無邪気に遊ぶ蒼汰朗に目をやった。

皆神山

今年は全国的に、例年より早く春がやって来た。信濃路でも三月の末から桜の開花が始まり、四月に入るとあちこちの桜の名所から満開の便りが届いた。しかし、新型コロナウイルス感染症再拡大への懸念から、桜の下での宴はどころも自粛。長野市の隣、須坂市にある臥竜公園の「さくらまつり」も、開催されたものの期間短縮、夜桜ライトアップも中止となった。

大地たち親子も、臥竜公園内を歩きながら桜を愛で、しばしの春を楽しんだ。

今年には芽吹きも早かった。桜が散るのを待たずに若葉が萌え、四月末には残雪の北信五岳と新緑が、鮮やかなコントラストを呈していた。

大地一家は、週末を利用し車でのハイキングに出掛けた。手作り弁当を持って、できるだけ人との接触を避け、近場へ足を運ぶことにした。

「さあ準備はいいかな、出発するよ」

大地が後部座席のチャイルドシートに座った蒼汰朗の様子を確認しながら言った。

「はい、大丈夫よ。お天気が良くなつて、ありがたいね。蒼汰朗もうれしそう」

芳が笑顔で言った。

「では、まず皆神山へ向かいます」

大地は車をガレージから出した。

「皆神山は最近お参りできてなかったから、久しぶりって感じね。毎年春と秋に大祭をしていたんでしょ？」

芳が訊いた。

「そうだよ。春は長野主会だけで、秋には東海教区の各機関が協力して祭典をしていたんだ。節目の年には、全国にも呼び掛けて盛大にお祭りをしていただけけど…」

「コロナでできなくなったのよね」

「そう。この春もコロナの影響で、会長が代表で参拝しただけらしいな。皆神社としても、境内に大勢の人が集まるのは避けたかっただろうからね」

「仕方ないわね」

「この様子だと、秋の大祭も代表でお参りするだけになりそうなんだって」

「寂しいことね。でも、家族三人なら大丈夫だよね」

「たぶんね」

皆神山は、長野市松代町まつしろまちの東南に位置し、標高六五九メートル、周囲約八キロメートルの安山岩あんざんがんの溶岩ドームで、麓からは二八〇メートルほどの高さである。頂上の皆神社近くまで、車で上ることができる。

周囲の山並みと異なり、地面から盛り上がったように独立している独特の山容から、人工物だと言う者も出てき、「太古に作られた世界最大のピラミッド」という説が起ったくらい珍しい山である。地元では毎年「ピラミッド祭り」なるものが開催されている。

大本にとつてはゆかり深い霊山で、聖師さまは以下のようにお示しになっている。

信濃の国松代町の郊外にある皆神山は尊い神山であつて、地質学上世界の山脈十字形をなせる地であり、世界の中心地点である。四囲は山が十重二十重とえはにとりかこんで、綾部、亀岡の地勢とすこしもちがわぬ連華台れんけだいである。ただ綾部は日本の山脈十字形をなせる地で、これはまた世界的であるだけの違いである。（『月鏡』）

「聖師さまが高熊山で修行された時、霊界に入られ、最初に連れて来られたのが皆神

山だったのよね」

「そうそう、修行中、神懸かりになって最初に連れて来られたのが富士山と皆神山で、空中から眺められたそうだよ。霊界の皆神山は実物よりはるかに大きくてきれいで、形はまったく変わらなかつたんだって。聖師さまは、その時の様子を歌に詠んでおられたはずだよ」

大地が言う聖師さまのお歌が以下である。

吾^{われ}は空ゆく鳥なれや

はるかに高き雲に乗り

世も久方の空の海

深き恵みに包まれて

高き稜^{みいづ}威を仰ぎつつ

下界はるかに見はらせば

地上の人は自己愛に

包まれ手振り足振りを

してゐる姿の面白や

○
神の翼に抱かれながら

魂は駿河の富士詣で

富士の高嶺にわが魂たちて

秋津島根をみはるかす

神の使は皆神山に

われを松代つれてゆく

山脈十字の信濃の国は

永遠の礎神守る

富士の高嶺や皆神山を

あとにわが魂帰り来る

眼覚ませば小夜更け渡り

峰の松風身にしみる

此処は何処よとよくよく見れば

稜威高熊巖の洞

高熊御山の四十八宝座

雪の降る夜を静座する

夜は淋さびしい松吹く風の

音も聞きえず霜が降る

寒さひだるさこらへて一人

更ふくる霜夜しもよに道たど辿る

天津御国あまつみくにも根底の国も

悟りそめたる洞ほらの中

夜風身にしむ淋しき襲ふ

飢うゑと渴あきが身に迫る

土と火水の御恩を悟り

神に感謝の涙する

(歌集『故山の夢』)

「現界の皆神山もそこその大ききだけど、
靈界ではどれだけ大きかつたんだらうね」
「ん…、想像できないわ」

芳が首をひねった。

「聖師さまは、実際に皆神山に登っておられるんですよ」

「そうだよ。確か、昭和四年かな。その時に、素戔嗚尊すさのおのみことが皆神山で比良加ひらか（平瓮）を焼かれています、それが陶器の初まりだともおっしゃっているんだって」

「ヒラカって何？」

「平たい土器のお皿のことだよ。たぶん神さまにお供えする“かわらけ”だったんじゃない」

「あの三方にのせる“かわらけ”のこと？」

「だって、土器とかいて“かわらけ”って読むでしょ」

「へえ、そうなんだ。じゃあ陶器発祥の地ということね」

「神代のことだと思っけどね」

「あつ、そういうことね」

大地の運転する車は長野市内を抜け、国道十八号線から県道三十五号線を南に入り、千曲川ちくまに架かる松代大橋を越えた。その先の上信越自動車道の高架下を潜ると、十数階建ての白いホテルが目に見え込んでくる。一九九八年の長野冬季オリンピックに併せて建てられたもので、何度か名前が変わり、現在はロイヤルホテル長野となっている。

平成十六年と二十一年の秋、皆神山の記念大祭に併せて行われた「皆神山ウオーク」では、このホテル前の駐車場が起点となり、教主さまと共に皆神山山上を目指した。

「ここへ来ると思い出すんだよね。あの時、僕は高一でウオーク隊に参加していたんだけど、教主さまがホテルの前で、エスベラントで出発の号令をかけられた情景が、すぐく印象に残っているんだ」

大地が懐かしそうに言った。

「私も両親に勧められて、何かあるのかよく分からないで参加したけど、とても楽しかったっていう記憶があるのよ」

「良い思い出だね」

「そうね」

チャイルドシートの蒼汰朗は、相変わらず機関車のおもちゃを手にご機嫌である。

松代は、六文銭の家紋で知られる真田氏の居城・松代城：別名・海津城（かいづ）があった町である。

松代城は、武田信玄が上杉謙信と戦うための拠点として山本勘助に命じて築かせた城で、千曲川のほとりという地形を生かした天然要塞だった。その後、一六二二年（元

和八)に真田信之が上田城から移って以来、真田氏十代が城主として続いた。

ほかにも幕末に開国論者として名を馳せた佐久間象山をまつる象山神社など、歴史を感じさせる城下町の風情がそこかしこに残っている。

「芳、松代、って良い名前だと思わないか？」

「そうね、良い名前…かな？」

「ほら、松の代と書くだろ、まつのよ」

「あ、そうか、みろくの世ということね。ほんとだ、良い名前だね」

皆神山へ車で上るときには、山の反対側から頂上へアクセスすることになる。大地は山裾の左手の道を走り、住宅街を抜けて上り口へ向かった。途中数箇所急カーブがあるものの、さほどの急斜面でもなく、楽に上り切ることができる。

道中、見落としやすいのが、中腹に鎮座する岩戸神社だ。天照皇大神を祭り、皆神山ピラミッドの入り口ではないかといわれる小さな岩穴がある。その奥は謎とされている…との説明があるが、定かではない。

しばらく進むと視界が開けてくる。秋になると道の両側がススキの群生となる。車は、ほどなく山上の駐車場に到着した。

「さあ、着いたよ」

大地が蒼汰朗を車の外に下ろすと、待つてましたとばかり走りだした。

「ほら、蒼汰朗、危ないから待つて」

芳が慌てて追い掛け、蒼汰朗の手をつかんだ。三人は、入り口のずいじん随神門の石段を上った。大地と芳が一礼すると、蒼汰朗も小さく頭を下げた。

石の宮

境内に入ると、少し空気が変わったような気がした。蒼汰朗そうたろうが手を振りほじき、またチヨコチヨコ走りだしたが、数メートル進んですぐに立ち止まった。初めての場所
で勝手が違うためか、少し戸惑っているようにも見えた。大地と芳かむるが追いつくと、蒼
汰朗が芳の手を掴つかんだ。

正面に延びる参道の左側に社務所がある。普段は無人のようだ。

「祭員はここで着替えをするんだ」

大地が社務所を見ながら言った。

「最初にお手伝いに来た時、私もここでお茶出しをさせていただいたの。この境内には水道がないから、ポリタンクで水を運んでくるのよね」

「そうそう、祭員の手水もポリタンクで運んでいるね。お抹茶接待をするときには、たくさん使うんで大変だって言ってたなあ。みんなだんだん年を取ってくるから、駐車場からここまで運ぶのも一苦労のようだよ」

「大変よね」

社務所を過ぎると六段ほどの石段がある。蒼汰朗も芳に手を引かれながら、一段ずつ大股で上がった。上り切ってから「ワンワン」と言つて、右上を指さした。

「そう、ワンワンね」

芳が優しく言つた。

「狛犬こまいぬだから、ワンワンには間違いないか」

大地も頷うなずいた。

大地と芳は、正面の社殿に一礼した。

境内では一番大きな侍従神社である。

「ここは、実在した偉人を神さまとして奉斎しているみたいだね」

侍従神社に鎮まる侍従大神は、信州・佐久の内山城主だった内山美濃守満久みののかみの三男・下野守三郎満顕しもつけのかみみつあきとのこと。十三歳で鞍馬山に入って密教を厳修し、ついには修験道を極め、のちに信濃全域の山伏の支配権を得ていたといわれている。死後、生前の姿を木像に写して侍従坊大天狗明王として祭られた。今から約四百六十年前のことである。それが明治に入ってからの神仏分離令等で、侍従大神として奉斎されたという。

侍従神社前から右に折れ、さらに左に上がって行くと、もう一つの社殿が立つて

いる。こちらが千三百年前に奉祀された熊野出速雄神社で、皆神山の本社とされ、松代の産土社でもある。熊野の名が冠してあるように、紀州・熊野権現を勧進した神社で、この地方では最古とある。ご祭神は、出速雄命、伊邪那岐命、伊邪那美命、速玉男命などで、農耕、芸術の神としてあがめられている。

熊野出速雄神社と侍従神社、そしてその他いくつかの社を合わせて「皆神社」と総称される。

大地たちは熊野出速雄神社に参拝した後、さらに右手奥へと参道を上った。少し進んだ左手の木立の中に、自然石の低い歌碑が立っている。大地たちは、歌碑の前まで行くと、蒼汰朗の目線に合わせるようにしゃがんだ。

「みすずかるしなのくのくにの神山にともらつどひて世をいのらなむ」

大地が歌碑の文字を目で追いながら、ゆっくりと詠み上げた。

三代教主さまが初めて皆神山に登拝されたのが昭和二十九年九月二十六日。その前夜、当時の長野支部で薄茶の接待を受けられた後、二代教主さまもお使いになったという貴人台（茶道具）に墨書されたのが、この碑のお歌である。

「すてきな字よね」

「そうだね。三代さまがご自身で詠まれたお歌を、ご自身の書で碑にすることをお許しになったのは、これだけらしいよ」

「全国でこだけってことね」

「聖師さまのお歌を三代さまがお書きになったり、一文の碑はあるようだけどね」

「ということは、とても貴重だね」

「でも、これは二代目だね。初代は、ほら、あそこ」

そう言つて大地は、今上つてきた参道の向こう下手を指さした。

「そうだ、この前読んだ『みろくのよ』誌の五月号の教主さまインタビューに書いてあつたよね」

「そう、教主さまがご就任になった年だから、ちょうど二十年前、三代さまの歌碑が心無い者によつて倒されて、その三カ月後にアメリカで同時多発テロが起こつたんだ。それから世界で紛争やテロが頻発するようになったから、教主さまは、衝撃的な出来事として覚えておられると書いてあつたね」

「インタビューの冒頭でおっしゃつていたから、私も印象的だったわ」

大地と芳は、目を合わせて頷いた。

蒼汰朗は退屈してきたのか、芳に抱きついてきた。

「喉が乾いたね、お茶飲もうか」

芳はトートバッグから水筒を取り出してコップにお茶を注ぎ、蒼汰朗に渡した。蒼汰朗は両手でコップを持ち、上手に飲み干した。

「さあ、上に行こうか」

三人は参道に戻り、途中の鳥居をくぐって頂上へ向かった。歌碑からは二十メートルくらいの距離だろうか、そこには奥の宮がある。神社の境内図には、「富士浅間神社」と記されているが、大本では「奥社」とか「石の宮」と呼んでいる。

昭和四十八年、大本から猷納・建立されたこの石の宮には、三代教主さまによる『おおもとすめ おおみかみ大正皇大神』のご真筆と、もともと皆神社に祭られていた木花咲耶姫命このはなさくやひめのみことさまの木製のご神像が奉斎されているという。

「このお宮は、本当は亀岡の瑞泉苑に建てられるはずだったんだって」

大地がお宮の起源を説明した。

「聖師さまがお生まれになったところ？」

「そう、第二次大本事件まで瑞泉苑にあった石のお宮を、当時のままに復元されるこ

とになっていたらしいよ。何て言ったかな…、確か…「神聖神社」

「それがどうしてここに立ったの？」

「さあ、僕も大道場修行で瑞泉苑参拝の時に聞いたんだけど、案内してもらった先生も理由は分からないって言ってた。皆神山に石の宮が建つ二年ほど前に、瑞泉苑での石の宮再建が機関誌で発表されていたけど、なぜだかそれが、皆神山に建てられたそうなんだ。あのお宮が事件前の神聖神社の“写し”だという当時の記事が残っているらしいね。修行では、僕が長野出身だからっていうので、そんな説明をしてくれたんだ」

「なんだか不思議なご縁がありそうね」

石の宮の周囲は、風雪を凌ぐために、立派な上屋で守られている。三人は石の宮の正面に立ち、大地の先達で天津祝詞を奏上した。蒼汰朗も二人の動作に合わせて、頭を下げたり、拍手をした。その仕草が愛らしく、芳は祝詞を上げながら笑顔になった。

神号奉称のご神名は、「おおもとすめ大天主おおみかみ太神」と「おはな木花咲耶おはな姫命」である。二人は心地よく祝詞を上げたが、蒼汰朗はすぐに飽きてきたようで、途中から二人の周りを歩きだした。

「上手だったね」

大地は蒼汰朗を抱きかかえ、頭を撫でた。

「ねえ、もう、ゴルフ場はやってないようね」

芳が周囲を見渡ししながら訊いた。以前営業していた皆神山ミニゴルフコースのことである。

「そうみたいだね。これだけ草が生えていたら、とてもグリーンとは言えないしね」

「でも、最初にここへ来た時には、私、ビックリしたわ。だって、神聖なお宮の目の前、三方がゴルフコースだったし、祭典中にプレーしているゴルファーがいたんだもの」

「まったく霊地にはミスマッチだったよね。以前、祭典中にゴルフボールが飛んで来て、お尻に当たった参拝者もいたそうだよ」

「えっ、ホント!？」

「いつだったか母さんが、＼こんなものはそのうちに必ずなくなるはずよ…＼って言うていたんだ。僕は、どうかなあ？　と思っていたけど、＼予言＼通りになったね」

「お母さん、スゴイ！」

芳が目を丸くしながら言った。

二人は両側から蒼汰朗の手を引き、ゆつくりと参道を下りた。

「そう言えば、確か…」

鳥居から少し下ったところで、大地が左の方へ目をやった。

「これが、教主さまお手植えのキノハナザクラだね」

教主さまがご就任になって三年後の平成十六年、記念大祭の時に教主さまによって三代教主さまの歌碑の除幕がなされ、それに続いて植樹式が行われた。その時のキノハナザクラである。

この時、教主さまは、二首の歌をお詠みになっている。

貴人台きじんたいにしるし給たまひし三代教主さんだいきょうしゅ様がみ歌

五十年いそとせめぐり今ぞ歌碑建つ

皆神山かみやまの木の花桜はなざくら永遠とほに栄え

安やすけきみ世を守らせ給へ

花の時期は過ぎ葉桜となっていたが、脇に由緒書きの銘板が立ち、木の周りを広く囲っている。すぐにそれと分かった。

「教主さまが植樹されたのは、皆神山ウオーク隊の時よね」

芳が訊いた。

「そうだよ。僕が高一の時さ」

「私は中学生だったから所々しか記憶にないけど、根元に土をかけておられる教主さまのお姿は覚えているの。あの時は大勢の人だったよね」

「僕も、歌碑の除幕と、植樹シーンは覚えているなあ。でもよく考えたら、あれから一度も花が咲いたところは見てないんだよね。なんか、もったいないことだな」

「本当にそうよね。来年は花の時期に来ましようね」

「そうしよう。四月中ごろかな」

木花咲耶姫命が祭られているこの神山で美しく清楚なコノハナザクラを見たい…、そういう願いが大地と芳の心に湧き上がってきた。

「こんな気持ちになったことが、きつとおかげだね。それに蒼汰朗にも見せてやりた
いしね」

皆神山を吹き抜ける薫風のように、爽やかな気持ちに満たされ、三人は楽しみに参道を下った。

ワクチン

皆神山を後にした大地一家三人は、安曇野方面へ足を延ばした。松代から高速を使つて約一時間、向かったのは日本一の敷地面積を誇る「大王わさび農場」である。

豊かな北アルプスの雪解け水が伏流水となつて扇状地の下をくぐり抜け、安曇野市穂高の地に湧き出ている。その原野の一角を大正初期から二十年の歳月をかけて開墾し、今日まで清潔な水を利用して、ワサビ栽培が行われている。安曇野を代表する観光スポットであり、大地と芳にとつては結婚前のデートコースとして思い出の場所でもあった。

「懐かしいわね」

「ここは何度来てもいいところだな。やっぱりこの清流と水車は、雰囲気あるよね」

黒澤明監督の映画「夢」の第六話「水車のある村」のロケが行われたことで一躍有名となった。中でも農場の脇を流れる万水川と犀川の合流地点の自然が監督の目に留まり、映画のセットとして三つの水車が作られ、今もそのまま残されている。雪解け水の流れに素朴な音を立てながら回る水車が、映画のワンシーンのように、訪れる人をしぼし「夢」の世界へいざなうようである。

場内を一巡したところで、蒼汰朗そうたろうはおなかがすいてきた様子。ベンチで弁当を広げようかと思っていたが、持ち込みはNGとのこと。仕方なく大地は農場周辺の田園へ車を出し、広めの路肩を見つけてエンジンを切った。

「田んぼがあつて良いとこね。じゃあ、お昼を頂きましょ。一緒に三首のお歌ね」

芳に促され大地が、天の恩…と発声すると、蒼汰朗が小さな手を合わせ、それをまねた。

「てんのおん、つちのめぐみに、うまれーたらー、いったらちまーしゅ」

車内に笑いが起こった。

「短縮バージョンだけど、うまいもんだよ」

親バカである。

「ささやかな幸せって感じよね」

芳が蒼汰朗の頬についた米粒をつまんで口に入れ、小さくほほ笑んだ。

○

令和三年の夏がやってきた。

全国的に梅雨入りが早かった今年、夏の訪れも、やけに早足でやってきたようだ。

修景事業を展開している小布施の町も、コロナ禍で、観光客の姿がまばらになっている。そんな中、大本北信支部に本部から久しぶりの来客があった。かつて東海教区の特派宣伝使であった高村浩一である。

皆神山の石の宮とコノハナザクラの視察のため、長野へ来訪。時間に余裕があったため、特派時代に世話になった小布施の町村音江宅まで足を延ばすことにしたのだ。た。

「すみません、突然押し掛けて、ご迷惑じゃなかったですか？」

「何をおっしゃいますか。思いがけず先生にお会いできて、こんなありがたいことはないです。お仕事お忙しいでしょうに、忘れずにいてくださって、ホントうれしいこと」
「ここは忘れられませんよ。当時はまだ支部ではなかったですが、町村さんにはとてもお世話になりましたからね」

二人はしばし思い出話に花を咲かせた。

「ところで先生、今のコロナワクチンの接種について、本部はどんな見解ですか？」

町村が話を変えた。

「シリアスな質問ですね」

「支部の皆さんに訊かれるので困ってるんですよ。ちょうど良い機会だから、聞かせ

てもらえたらありがたいのですが…」

「分かりました。では…」

高村は一度背筋を伸ばして、説明を始めた。

「ワクチン接種は、決して強制でなく、本人が希望する場合に限り、接種を受けることができるというものですよね」

「今回はそうですね。強制といえば、大本の歴史でも、幼い三代さまへの種痘しゅとうを水晶の御魂みたまを守るということで、開祖さまは拒絶されたという史実がありましたね」

「はい、でもその一件は今回のワクチン接種と比較はできませんね。神柱である三代さまだからこそそのエピソードだと思えます。時代背景も医療環境も今とは違い過ぎます。もし今、ワクチンそのものに反対するなら、インフルエンザをはじめ、今ある全てのワクチンの存在に反対しなければなりません。それに当時、開祖さまも聖師さまも、信徒に対して種痘を受けるなどは言っておられませんしね」

「確かにそうですね」

「ワクチンを受ける人は、接種によってコロナ発症の予防や重症化の軽減を期待する効果と、逆の副反応のリスクとの双方を考えないといけないわけですね。その両方を

理解した上で、自らの意思で接種するかしないかを判断するということですよ」

「は？」

「ですから、結論から言くと、今回のワクチン接種については、ご自身の判断でお願いします、と申し上げるしかありません」

「そうなのでしょうが、私のようなおばあさんには、それが難しいのですよ。何か分かりやすい材料は頂けないのですか？」

「これは多くの国民にとっても難しいことだと思えますし、正直、私も分かりません。本当のところ、治験的なことも含めて、科学的・医学的な正確な情報が全て開示されていないと思えるからです。だからむやみに、賛成とも反対とも言えないのが現実です」

「でも今、日本で認可されたワクチンは遺伝子組み換えなのでしょう？ 大本はこれまで、遺伝子組み換えに反対してきたじゃないですか？」

「そうですね。ただ、農作物の遺伝子“組み換え”とは、かなり違うようなのです。今回はそれを越える高度な技術で、遺伝子工学技術やゲノム編集の分野のものです。もちろんネット上では、副反応の被害としてたくさん情報が流れています。中には怪しいものもありますが、私たち素人にはそれを検証する科学的・医学的な説明の知

識が十分でないということです。

それに、遺伝子組み換え食品の場合は、それらを拒絶しても他に選択肢がたくさんあります。でも、ワクチンの場合は、打つか打たないか、二者択一の厳しい選択ですよね」

「なるほど、確かに違いはありますね」

「遺伝子組み換え食品の場合は、その理論もある程度分かっている、国全体としても社会的な反対運動が根強くあります。それに実害の結果が出るまでには、長い年月がかかります。でもワクチンの場合は、理論も時間も組み換え食品とは大きく異なります。

大本がこれまでに社会的な事象、特に人の命に関わることに異を唱えてきたのは、教義に基づく問題、生命倫理の問題、そして食の安全問題などと、それに反対する裏付けがあったからです。今回のワクチン問題はその圏外にあって、とても複雑です。ですから、社会的責任を負う教団としての立場を踏まえながら、私たちもこれからしっかりと研さんしていかなければと思っています」

「でも、時間がない人もありますよね」

「確かに、信者さんの中には、医療従事者ということで、自らの意思に反して接種し

ないといけない人もおられます。また世間では、接種を拒否したがために、退職を迫られるというニュースもあり、問題視されています」

「そうそう、差別的なひどい話ですね」

町村が顔をしかめた。

「今、信者さんの中にも、次の六つの立場があるかと思っています」

高村が順に指を立てながら話を続けた。

「・すでに接種した人

・接種したいと思っている人

・職務上接種せざるを得ない人

・しばらく接種を控える人

・接種しないと決めている人

・接種を迷っている人

私たちは、どの立場も理解し、尊重した上で“大難を小難に、小難を無難に”と、誰もが救われるよう願っています」

「なるほど、そうですね」

「もし、教団が強クワクチン接種を否定し、もしそれに従った信徒がコロナにかかって亡くなってしまったら、その遺族からはどう思われるでしょうか。大本は相当重い責任を問われることになるでしょう」

「それはそうですね。極端な強要をすれば、社会から怪しい教団だと思われるてしまいますね」

「おっしゃる通りです。もちろん、副反応がはっきりと分からない今、強制的に接種を勧めめることもどうかと思います。年齢によっても難しい問題があります。特に若い女性の接種には警鐘を鳴らす専門家も多いようですね」

「まあ、私はもう先が短いですけどね」

町村が嫌みっぽく言った。

「そういう意味ではないですよ、参ったな」

高村が頭をかいいた。

「信者さんの中には、三代さまだったらこうされたんじゃないかとか、四代さまならこう…という人もいますけど、私はそんな方には、今は五代教主さまの時代なのだから、教主さまのご教示に神習かんならいましょう」とお話しているんですが、それでいいん

ですよ」

「はい、その通りです。まさに今、このお示しを実践させていただかないといけません」
そう言うと高村は、手元のカバンから資料を取り出し、町村に渡した。それには以下の教主さまのお示しが印刷されていた。

「私たち大本信徒は、百年前（※スペイン風邪の流行時）の聖師さまのお言葉の通り、このたびの新型コロナウイルス感染拡大に対しても同じように、衛生面、生活面で感染しないよう細心の注意を払って行動するとともに、今まで以上に神さまを敬い、正しき浄き信仰をさらに深めて心身の健全をはかり、天津祝詞や神言を日々奏上して靈界を浄めるご用にお仕えし、世の中の良い鏡となるよう努めさせていただきたいと存じます。

同時に歴代教主・教主補さま方の教えの通り、お土、お松、梅干しや梅肉エキスなどを頂くことも大事なことと思えます」（令和二年みろく大祭教主さまごあいさつ）

「先生、私は毎日、ご神水、お松茶と梅干しは頂いていますよ」

町村が笑顔で言った。

「それは何よりです。最近ネット上では、松葉に含まれる「スラミン」という成分が

コロナにも有効だという情報がクローズアップされているんですよ。これが正しい情報なら、大本は世に先駆けていますね」

「本当ですね」

「町村さん、お互いに『自分は今われよしになってはいないか』と省みながら、お土とお松、梅干しなどを頂いて、ますます自己免疫力を高めるよう頑張りましょう」

高村が力強く言った。

梅干しとラツキヨウ

「そうですね、コロナ禍の今に限らず、神さまの深いご神意を悟らせていただくには、まずは元気でないとねえ」

町村音江まちむらおとえが確かめるように言った。

「そうですね。心身共に健康が第一です。神さまから頂いている心、大本的に言うと直霊ちよくれい、それと肉体の両方が丈夫なことが大切ですね。心と体が共に健康になる手立てとして、私たち大本信徒は、お土とお松、梅干しなどを信仰的に頂くことで、おかげを頂戴できると教えられています。町村さん、さつきお渡しした教主さまのお示しの前に、『おほもとしんゆ』と『寸葉集』の一節があるでしょ」

高村浩一は、町村が手にしていたプリントを指さした。

大本の経綸しやうりんは病氣やまい直して無いぞよ。神から頂いた結構な身魂みたまを、がいこくの悪の霊魂みたまにけがされて了うて、肉体まで病魔やまいの容器いれものになりて、元の大神に大変な不孝を掛けて居る人民やまがみが、病神やまがみに憑つかれて居るのであるから、素もとの日本魂やまとたまに捻ねじ直して、チットでも霊魂みたまが光り出したら、病神やまがみは恐こわがりて逃にげて了うぞよ。

(明治三十二年旧七月一日)

改心と申すのは、何事に由らず人間心を捨てて了うて、智慧や学を便りに致さず、神の申す事を一つも疑わずに、生まれ兇の様になりて、神の教えを守る事であるぞよ。

(大正五年旧十一月八日)

お土は神さまへの信仰によっていただくものです。それによって必ずご神徳はいただきます。

『寸葉集』巻二)

「そうですね、お土もお松も梅干しも、市販の薬のように扱うのではなく、信仰によってお下げいただいているという気持ちをお忘れてはいけません。まあ、町村さんには釈迦に説法でしょうけどね」

「そんなことないですよ。こうして時々、教えていただかないと肝心なことを忘れてしまっていたり、ついおろそかになっていることがありますからね。み教えは繰り返して頂くことが大切だと思いますよ」

町村は真剣な表情で言った。

「同感です。み教えを自分に都合の良いように解釈すると大変です。たちまち、慢心、取り違いになりますから、お互い注意したいものです」

高村も頷きながら言った。

「これからおお土とお松、梅干しを素直に頂いて、私もまだまだ年に負けず、健康力を高めるように頑張りますね」

町村が笑顔で言い切った。

「はい、そうお願いします。町村さんは小まめに家庭菜園もされているようだし、血色も良いし、お元氣そうですねから大丈夫ですね」

高村が笑顔で返した。

「はい、おかげさまで。悪いのはここくらいかねえ」

町村が頭の人差し指を当てながら言った。

「それなら、私も負けませんよ、町村さん」

「あら、そう」

笑い声が茶の間に響いた。

「今は毎日、キュウリがたくさん採れてね」

町村はお茶請けに出したキュウリの一夜漬けを高村に勧めながら言った。

「採れる時期はいつときですかね。それにしても、このキュウリおいしいですね」

高村がしみじみと言った。

「あら、先生も畑をなさっているの？」

「はい、少しだけ」

「どんなものを植えてらっしゃるの？」

「今だと、夏野菜が中心ですけど…、キュウリ、水ナス、賀茂^{かも}ナス、トマト、オクラ、赤シソ、大葉、秋に向けてサツマイモとサトイモも植えていますね」

「あら、ずいぶんたくさんじゃないですか」

「まあ楽しみながら、少しずつですけどね」

「赤シソは、梅干し用ですか？」

「はい、今年は梅を二十キロ以上漬けました。半分は娘宅の分ですが、今回は五歳の孫娘と一緒に梅漬け作業をしたんですよ。赤シソはそれに使うのと、夏場のシソジュース用ですね。暑い時にはスキツとしますね」

「それはいいですね」

「今年漬けた梅の一部は、神苑内の梅です。天恩郷では、去年は極端に不作でしたが、

今年は大豊作で、ここ十年くらいでは最高でした。確か四トンくらい収穫されたんですよ」

「神苑の梅が豊作だというのは、今の時期、とてもうれしいニュースですね」

「そうですね、とてもありがたいことですし、何か意味があるのかもしれないですね。今年もコロナ禍で、収穫作業を近隣の信徒の皆さんにお願いできず、奉仕者だけで行い、丸二日かかりました」

「それは大変でしたね。本部の食堂で頂く梅干しも漬けたんですか？」

「はい。今年はたくさん漬けたと聞きました。梅には血液をきれいにする効果もあるんですよ」

高村は梅の効能を語りだした。

「健康力を高めるためには、まず血液をきれいに保つことが大切だそうで、その条件の一つが、血液が弱アルカリ性であるということです。そこで、酸性食品とアルカリ性食品をバランスよく取ることが大切なのですが、今の日本人は、酸性食品に偏り過ぎています。その代表が白砂糖ですね」

「私も、甘い物が好きだから…」

「正しい砂糖の取り方は、体重一キロに対して一グラム以下らしいのですが、今、一日平均百グラム取っているようで、甘い物が好きな人はとても百グラムでは済まないですね」

「でしょうね」

「小さな生菓子に三十グラム、ミカンの缶ジュース一本には八十グラムの白砂糖が入っているとか。で、白砂糖百グラムを弱アルカリ性にしようと思うと、ニンジンだと四百四十グラムも食べないといけないんです。これはかなり大きなニンジン二本分です」

「あら、そんなには食べられませんね」

町村は驚いた表情で言った。

「そこで梅干しが登場です。酸っぱい梅干しなら十グラム…中粒のものを一個食べるだけで弱アルカリ性になるんです。梅肉エキスなら、三グラムでいいそうですよ」

「それはスゴイですね」

「ただし、調味料を使って食べやすくした甘い梅干しはダメですよ」

「でしょうね」

「冷蔵庫で保存してください、と表示された梅干しがありますが、冷蔵庫に入れておかないと腐ってしまう梅干しなんて、とんでもないことですよね。」

四百二十年前の梅干しを食べた方の話ですが、その梅干しが非常においしかったと。そしてその成分を調べたら、今の梅干しと全然変わらなかったそうです。梅干しを入れた日の丸弁当や、おにぎりに梅干しを入れるのは、ご飯を腐りにくくするためですよ。これは私たちの先祖が、梅干しの殺菌力を利用してきた技ですね」

「市販のお弁当だと、ご飯の真ん中に小さいカリカリ梅が入っていますけど、あれは本来の意味からするとちよつと違うってことですね」

「そういうことでしょうね。いや、町村さん、梅干しの話をしていると、何だか口の中が酸っぱくなったような気がしませんか？」

「ほんと、そうですね」

二人は笑顔で目を合わせた。

「そうそう、私、ラッキョウも作っているんですよ」

高村が思い出したように言った。

「鳥取のような砂地ではなくて、元は田んぼだった畑ですから、最初はうまくできるか不安でしたが、これが結構採れましてね」

「でも、収穫後が手間でしょ？」

「そうなんです。あんなに面倒くさいものだとは思いませんでした」

高村の言葉に実感が込もっていた。

「ここ数年、収穫後は毎年何時間もかけて処理しています。だから今は少なめにして、翌年の植え付け用を残して今年は五キロほどを漬けました」

「それでも、結構な量ですね」

「町村さん、市販のラッキョウって結構いい値段するでしょ。私も以前は、高いな〜って思っていましたけど、自分でやってみて、その理由が分かりました。漬けるまでの手間を考えたら当たり前ですね」

「先日たまたまテレビで鳥取のラッキョウ農家を見ましたけど、収穫後、根と茎を切るのを手作業でされていましたね。とっても大変そうでしたよ」

「ご存じだと思いますが、ラッキョウは、〃万病の妙薬〃って、聖師さまがおっしゃっていますね」

「そうそう、確か…」

二人は『月鏡』にある以下の聖師さまのラッキョウについてのお示しを思い出しながら、ラッキョウ談義を続けた。

万病に効く薬は、らつきようである。前にもちよつと話しておいたが、らつきようは多量の酸素を含有しておつて、心臓、肺臓、胃腸、腎臓、脚氣等かっけとうあらゆる病氣に特効がある。その上に血液を清浄にし循環をよくし、水氣をとるゆえに水腫れの病に使用し、また利尿剤としても顕著な効能があるもので、解熱剤としても、収斂剤しゅうれんざいとしても有効である。食事に際し、副食物としてとつているところ、この病はおの自ずから全治するものである。要するに内臓一切の病氣に効くのである。

ただし、一個の瓶は一人の専有として、他の人に食べさせてはいけないのである。その理由は、多人数によつて一瓶を食するときは、靈がこもらぬからである。(二月鏡)

「先生、よく分かりました。梅干しも、ラッキョウも本物を選んで、お土とお松のように、信仰的に素直に頂くことですね」

「はい、それがよろしいかと思ひます」

町村は笑顔で頷うなずきながら、高村の湯飲みにお茶をつぎ足し、少し間をおいて話を続けた。

「そうだ先生、もう一つ質問してもいいですか？」

町村が何か思い出したように尋ねた。

宣霊合祀

「高村先生、宣霊合祀祭のことなんですが…」

町村音江が切り出した。

「はい、どんなことでしょう」

「実は、うちの支部の信者さんに先日、本部から宣霊合祀祭の案内が届いたんです。ほら、先生もご存じでしょ、かんべ神部さん」

「はい、のふよし神部信義さんですね。確か今年の春に亡くなられたんじゃないですか？」
「そうなんです、四月の末でした。八十五歳でのご昇天でした。まだまだお元気だと思っていたんですけど、亡くなる半年ほど前から、急に体調を崩されてね。支部にとっても惜しい方を亡くしたと、残念に思っています」

「そうでしたか。とても信仰熱心な方でしたからね」

二人は生前の姿を思い浮かべ、しばらく思い出話で故人を偲しのんだ。

「それで、奥さんのあさ亜紗さんに、本部から宣霊合祀祭の案内が来たので、お参りに行かれるそうなんです」

「そうでしたか、それは良かった。神部さんも霊界でさぞ喜ばれることでしょうね」

高村が小さく頷いた。

「それで、ご長男の靖夫さんが車で連れていくことになったそうですが、亜紗さんが、靖夫さんに宣霊合祀祭のことをうまく説明できないから、私に説明してほしいって頼んでこられたんです。でね、先生に、宣霊合祀祭や宣霊社のことを、あらためてお聞きしたいんです。間違ったことをお伝えしてはいけないな……って心配していたところ、ちようど先生がお越しになったので、基本的なことを教えていただきたいと思いつてね」

町村は申し訳なさげに言った。

「そういうことですか、お安い御用です。では…」

高村が居住まいを正した。

「ところで、神部さんのご長男は、亀岡に行かれたことはありませんか？」

「はい、ご両親と一緒に何度か行かれてはいますよ」

「じゃあ、宣霊社が天恩郷にあること自体はご存じですね」

「たぶん、知っておられると思います」

「それなら良かった。宣霊社の姿をご存じなら、町村さんが説明をされても、イメー
ジしやすいでしょうからね」

「なるほど」

町村が頷いた。

「ご承知のように、宣霊社は、万祥殿での朝夕拝の後、神苑巡拝の最後にお参りする
ところですね」

高村が町村に問い掛けた。

「はい、巡拝では『天津祝詞』を奏上し、ご神号奉称はなくて、『かななからたまちはえ惟神霊幸倍ませ』を
奏上します」

「そうですね。では、そもそも宣霊社には誰を祀まつつてあるかということですが、町村
さん、ご存じですよね」

「はい、この世で宣伝使を拜命していた大本の信者さんたちです」

「そうですね。教御祖おしえみおやさま方をはじめ、現界で宣伝使を拜命していた先人の方々が合
祀されています。この場合、宣伝使の階級：正宣伝使、准宣伝使、宣伝使試補の区別
なく、平等にお祀りされています。それで、これまでに合祀された宣伝使は…、確か…」

高村は、スマホを取り出して何やら操作し、しばらくして「あった」と言いながら、話を続けた。

「ちょうど、先日調べたところだったんですが、これまでに合祀された宣伝使は、一万三千八百六十六柱あります」

「そんなにお祀りされているんですね」

「そうなんですよ。そして、この一年間、つまり昨年令和二年の八月から今年の七月までに合祀された宣伝使は、百二十六柱でした」

「神部さんは、まだその中に含まれてはいないわけですね」

「そうですね。神部さん宅にご案内が届いていたということは、次の『宣霊合祀祭』で合祀していただけるわけですね。本部では、毎月十四日の午後二時から宣霊合祀祭と決められています。

宣伝使拜命者は通常、ご昇天後、綾部の祖霊社とご自宅の祖霊舎での五十日合祀祭を経て天界にお入りになった後、さらに五十日、つまりご昇天から百日たった次の十四日が該当日になるんです」

「そうなんです。ということはい…」

町村はしばらく考えてから訊いた。

「亡くなつてから百一日目に合祀される方もあれば、百三十一日目の宣伝使もあると
いうことですね」

「そうなんです。合祀日が決まっているものですから、一日の差で合祀が一カ月ずれてしまうことはありますね。その上で、大神さまのお許しと教主さまのご裁可をいただかれて、^霊霊国の天使、^瑞瑞の^魂靈魂の大神さまのみ使い”として、霊界で大活動を始められることになるのです。

あの世の中でも特に天界には、天国と霊国とがあります。霊国の天人、エンゼルである宣霊は、神さまの命により、天国だけでなく、地獄にまで行かれて救いのご用をお務めになるそうです」

「霊界で、幅広い活動をされるということですね。そういうことだと、…私、霊界で
ご用ができるかなあ？ 自信ないなあ」

「大丈夫ですよ、^身身魂^相相応のご用をさせていただきますから。…というか町村さん、
霊界行きは、まだまだ先の話じゃないですか」

高村が笑顔で言った。

「さあ、どうでしょうね」

町村が苦笑した。

「それにね町村さん、この世の宣伝使が神さまのお道を広めるため宣伝のご用に出掛けるときには、その土地に因縁のある宣霊が、霊界から現界の宣伝使のお手伝いをされるということなのです。現界と霊界からの両方で力を合わせて、大きなご神徳を發揮させていただけると教えられています」

「それは心強いことです」

「はい、とてもありがたいことです。それだけに、天恩郷に参拝した宣伝使は、必ず宣霊社に参拝しなければならないとご教示されています」

「私も聖地へお参りに行ったら、必ず巡拝して宣霊社に参拝しています。宣霊社には、私の両親と亡くなった夫もお祀りしていただいていますしね」

「お身内の方がお祀りされていると、おのずと身近に感じますよね」

「人間心かもしれません、遺族にとつてはともありがたいことだと思います」

町村が笑顔で言った。

「私たち本部の宣伝使も、聖地から地方機関へ宣伝出向するときには、必ず万祥殿で

のお礼拝と神苑巡拝を行っています。月の輪台では、瑞霊のご守護をお願いし、宣霊社では、出向先にゆかりのある霊国の宣伝使と共に活動できることを願って出向きます。例えば、長野へ出向するときは、長野にゆかりある宣霊の皆さまのご守護をお願いして出発します。昨日もそのようにして来ました。

そして、ご用を終えて亀岡へ帰苑したら、出発前と同じように万祥殿礼拝と巡拝を行い、宣霊に報告と御礼を申し上げるんですよ」

「そういうふうになさっているんですね」

町村が感心した表情で言った。

「ですから、宣霊社にお祀りされたご先祖は、〃祖霊〃として参拝するのではなく、瑞の靈魂の大神さまのお使いの〃エンゼル〃としてご活躍になっている〃宣霊〃ということ、神さまと同じように四拍手をしてお礼拝するわけですね」

「神さまと同じようにとは、大変な栄誉じゃないですか。四拍手でお参りすることは、そういう意味があるんですね」

「そうですね、とても恐れ多いことであり、大変ありがたいことです。ですから、それに^{こた}えられる働きをしなければいけませんし、私たちもこの世でしっかりご用にお仕えして、その資格をいただいておかないといけないわけです」

「それは重大な責任ですね」

『霊界物語』第十四巻の巻末に、このようなお歌があります。

言行心一致せざれば地の上の

宣伝使のわざつとまらざるべし

私はこのお歌を思い出すたびに、身が引き締まるんです」

「ん、厳しいですね」

「町村さん、お互いに頑張りましょう」

「はい」

町村は小さく頷いた。

「そうそう町村さん、ご存じかと思いますが、今年の夏から“宣霊社臨時祭”という祭典が新設されたんですよ」

「七月号の『大本』誌に案内がありましたね。まだ詳しく読んでないんですけど…」

「そうでしたか。宣霊合祀祭の日が毎月十四日と固定されているので、平日だとどうしても参拝できない方もあると思うんです。また、昨年からのコロナ禍で、やはり参拝を控えるご遺族もおられます。ですから、ご都合に応じて随時、宣霊社でご指名さ

れた宣霊に対して、正式参拝いただけるようになったものです」

「例えば、私の両親と夫の祭典をお願いでできるということですね」

「そうなんです。お身内の方はもちろん、併せて身近だった宣霊の方のお祭りも申し込んでいただけます。祭典執行日もご希望に応じています」

「もちろん、本部の祭典や行事と重ならない日がいいんですよ」

「はい、そうお願いしています。開始時間も、午前は十時、十一時、午後は一時、二時のいずれかで希望を申し出ていただけることになっているんですよ」

「それもありがたいご配慮ですね。いずれお願いしたいですね」

「はい、その時はぜひ！」

高村は、七月号の『大本』誌の中に「宣霊社臨時祭申込書」があることも案内した。

「ありがとうございました。今伺ったことを神部さんにお伝えします」

町村は礼を言ってから、少し身を乗り出した。

「先生もう一つ、宣霊社に関連して、ずっと思っていたことを質問してもいいですか？」

「はい、何でしょう」

「実は鳥居のこと…、なんです」

町村は、言葉に力を込めて高村に訊いた。

黒木鳥居と御杖代

「天恩郷の宣霊社の前には、鳥居がありますよね」

町村音江が訊いた。

「はい、黒木の鳥居ですね。両聖地で鳥居があるのは唯一、宣霊社の前だけです」

高村浩一が頷きながら答えた。

「ですよね。私、前々からその理由を知りたかったんです」

「そうでしたか。では、ちよつと『深い話』になるかもしれませんが、ご説明しますね」

高村は一口お茶をすすり、背筋を伸ばした。

「実は第二次大本事件前の聖地には、鳥居がいくつかあったようです。記録写真によると、亀岡の月宮殿前にもありましたし、綾部の神苑内、それから開祖さまの奥都城にもありました」

「昔はたくさんあったのですね」

「そのようです。日本人なら、鳥居があればそこが神社であり、神さまをお祭りしているところだと分かりますからね」

「そうですね」

「鳥居というのは、神域への目印や門、境目、あるいは結界の役目や意味があるようです。中には巨大なものや、神社のシンボリック存在の鳥居もありますね」

「ドラマでよく登場する、京都の平安神宮の朱塗りの鳥居も大きいですよね」

「はい、確かに大きいですが、日本のベストファイブには入らないようです」

「そうなんですか？」

町村は不思議そうに言った。

「何といつても大きいのは、和歌山の熊野本宮大社の大鳥居で、確か高さは三十四メートルほどあります。本宮大社から五百メートルくらい離れた熊野川の畔ほとりの大齋原おおゆのはらという旧社地に立っていて、とにかく大きいんですよ。初めて見た時は、びっくりしましたね」

「そんなに大きいんですか。一度見てみたいですね」

「この大齋原という場所は、熊野川と音無川おとなしが合流する中州で、昔はそこに熊野本宮大社があったんです。ところが明治時代の大水害で社殿の多くが流出したそうです。それで、かろうじて水害を免れた社殿を現在の場所に遷座したということです。で、

元の場所を大斎原といい、現在はそこに石造りの小さい祠ほこらと、巨大な鳥居が立てられているんです」

「そうなんです」

「ちなみに、昭和六十年の秋でしたか、その大斎原を斎場に、当時の和歌山主会主催で『紀州熊野本宮大本歌祭』が開催される予定でした。でも当日、特設舞台の準備が終わった後、降り出した雨のために、近くの屋内ホールに場所を移して行われたことがあるんですよ」

「そんなことがあったのです」

「和歌山の熊野は、『靈界物語』第二十三巻の舞台として登場するゆかりの地でもありますし…。アッ、すみません、つい話が脱線してしまいました」

「いえいえ」

高村が話を戻した。

「鳥居の話…ですが、そもそもどうして『鳥居』と言うかは諸説あり、正確には分かっていないようです。で、語源に関しては『神さまのお使いである鳥が止まって居るところ』だからとか、人が『通り入る』からだといわれています」

「なるほどね」

「それから鳥居の形ですが、大きく二種類に分けられます。このように……」

高村はメモ用紙に簡単な鳥居の形を描き、それを見せながら説明を続けた。

「二本の柱の上に真つすぐな木材：『笠木』を載せて、その下、柱と柱の間にもう一本の材：『貫』を渡して強度を増したシンプルで直線的な形のを『神明鳥居』と言います。伊勢神宮などにある歴史的に古いタイプの鳥居で、宣霊社の鳥居もこの形です。

もう一つは、『明神鳥居』と言って、二本の柱の上に載った笠木の両端が上に向かって反っているのが特徴です。さっきの話で出た平安神宮や熊野本宮大社の鳥居はこちらの形ですね」

「なるほど。ところで、宣霊社の鳥居は事件前からあったのですか？」

町村が尋ねた。

「いえ、宣霊社の鳥居が建てられたのは、確か昭和三十五年の暮れ、三代教主さまのご意向で建てられたと記録されています。これは皮を剥ぎ加工した白木を使う『白木鳥居』に対し、クヌギの原木を樹皮付きのまま組んだ『黒木鳥居』と言われるものです。

鳥居の基本形で、日本で最も古い形だということです」

「白木に対して、黒木ということですね。でも、原木のままだと傷みも早くないですか？」

「そうですね。ですから宣霊社の黒木の鳥居は、すでに何度か建て替えられています。今の鳥居が建てられたのは、平成二十八年の夏でしたから、五年前ですね。長生殿ご造営や神教殿の建設に携わった京都の奥谷組によつて設置されました。

当時はクヌギ材の調達が大変だったそうです。以前は本部職員の大工さんが中心となって、自前で作っていたのですが、今は真つすぐなクヌギを見つけることが体が困難なようです。五年前は岡山県の山中で探し出したということでした。それに生木ですから、とにかく重いんです。設置作業も技術が必要だということでしたね」

「材料としても貴重なものですね」

「そうですね。大本とご縁のある丹後の元伊勢の外宮・豊受大神社にもありますが、あちらは確かスギの原木のようでした。宣霊社のように、クヌギの原木をそのまま使った黒木鳥居は、全国でも珍しいと思います」

高村が力を込めて言った。

「だからこそ、三代教主さまが黒木鳥居を建てられたご意向が知りたかったのです。以前、京都の神社に倣って建てられたという説明を聞いたことがあるんですが……」

「はい、京都の嵯峨野にある野宮神社ののみやの黒木鳥居を参考に建てられたということ聞いています。そのご真意については、明確な記録がないので、ここからは私の推察になります。いいですか？」

「はい、もちろんです」

「そもそもなぜ野宮神社か、ということですが、町村さんは野宮神社のことをご存じですか？」

「いえ、まったく知りません」

「分かりました。では順を追ってご説明します」

「お願いします」

「野宮神社の主祭神は、天照皇大神さまです。皇室の祖神、天系の神さままで伊勢神宮でお祭りされている神さまです。で、野宮神社は、昔のある施設の跡地に建てられたものです。それが『野宮』と呼ばれていました」

「野宮？」

「平安時代、天皇の代が替わるごとに天皇に代わって伊勢神宮の神さまに仕える未婚の皇女がありました。占いで選ばれた女性を『齋王』と呼ばれ、京の都から伊勢に移り住みました。その齋王が暮らす場所が『齋宮』という一大都市で、『いつきのみや』とも呼ばれ、今の三重県の明和町、…伊勢神宮から二十キロメートルほど離れたところにありました。今、明和町には齋宮歴史博物館など、齋宮に関する施設が数多くあるんですよ」

「あら、行ってみたいですね」

「齋宮候補の皇女というのは、皇族の中のお姫さまですが、当時は平均して十二歳から十三歳だったそうです。最年少が二歳で、最年長でも二十八歳だったそうですね」

「それで、一生お仕えするんですか？ 大変なお役だったんですね」

「基本、そういうことです。で、齋王に選ばれた皇女は、天皇の代が替わるまで都に戻ることなく、遠く離れた齋宮で、伊勢の神さまにお仕えしなくてはならなかったんですね。」

そして齋王に選ばれた皇女は、伊勢の齋宮に向かう前に、身を清めなくてはなりませんでした。まず宮中の『初齋院』というところで一年間、そして、洛外の清らかな場所を選んでさらに一年間、潔齋を行っただけです。

平安時代の初めから、その場所には嵯峨野の清浄地が選ばれていました。天皇の即位ごとに定められ、そこに齋王の潔斎のための仮の宮が建てられたわけです。それを「野宮」と呼んだのですね」

「潔斎をする場所が野宮ですか」

「はい、野宮は「黒木鳥居」と「小柴垣こしばがき」に囲まれ、俗界と隔離された神聖な場所でした。そこで、一年かけて身を清め、神さまや天皇の杖代つえわりとなつてご奉仕する「御杖代みつえしろ」となられたのです。この制度自体は奈良時代にルーツがあつて、鎌倉時代まで六百六十年間続いたそうですが、その後途絶えてしまいました。その間、六十四人の齋王があつたそうです。

野宮神社は、その野宮の跡に神社として存続してきた社なんです。野宮は『源氏物語』にも登場しますし、能の中にも「野宮」という曲があります」

「三代教主さまは、そうしたゆかりの地をお好みになつていたのでしょいか」

「そうですね。実際に野宮神社にも足を運んでおられますね。

三代教主さまは、宣霊社を野宮のいわれと重ねられ、その証として黒木鳥居をお建てになつたのではないでしょいか。そして、齋王が「御杖代」として身を清め神さ

まにお仕えたように、天界の大本の宣霊使が救世の神である瑞霊大神さまの“御杖代”としてお仕えてほしいとの願いを込められたのではないかと、合わせて現界の宣霊使は、宣霊社の黒木鳥居をくぐって参拝する時に、齋王のような覚悟を持ってほしいと願われたのではないかと、私は思っています。

だからこそ宣霊社は、瑞霊大神さまをおまつりする“月の輪台”がある月照山のすぐ脇に位置しているのだと思います」

町村は無言で何度も頷いた。

「そうそう、今の野宮神社の黒木鳥居もクヌギの原木で作られていて、宣霊社のよりはだいぶ大きいのですが、あちらは表面を樹脂で防腐加工してあるんです」

「え、そうなんですか。宣霊社の鳥居は、三代教主さまの心を体した、純粹で意味深い黒木鳥居ということですね。高村先生、よく分かりました。やっとスッキリしました」

町村は満足げな面持ちでほほ笑んだ。

受けた恩

今年は十月に入っても、日中はしばらく気温の高い日が続いたが、十一月になると寒さが駆け足でやってきた。長野市内の初雪も平年より数日早く観測された。

早朝、部屋のカーテンを開けると、いつもの見慣れた風景に、うっすらと雪化粧が施されていた。

「蒼汰朗、ほら、見てごらん」

大地は寝起きの蒼汰朗を抱きかかえて窓の外に目をやった。

寝ぼけ眼だった蒼汰朗も、いつもと違う景色に気付き、目を丸くして窓外を指さした。

「わあ、真つ白、雪だるま作れるかな？」

芳が訊いた。

「ん、どうかな。後で外に出てみようね」

大地が蒼汰朗の頭をなでながら言った。

昼を過ぎると、表の雪はすっかり溶けていた。かろうじて作れた小さな雪だるまも、雨宮家の玄関先で“汗”をかいていた。

「かわいい雪だるまにお出迎えしていただきました」

同じ中学校で教鞭きょうべんを執る東順子あずまじゅんこは、大地の後輩。今日は授業の持ち方の相談で、雨宮家を訪ねてきた。

「休日におすすめせん、お時間ください」

「いや、お役に立てるか分からないけど……」

大地が出迎えると芳が遅れて出てきた。

「いつも夫がお世話になつております。さあ、どうぞお上がりください」

「ありがとうございます。ちよつとだけお邪魔します。あ、蒼汰朗君、こんにちは」
東は芳の後ろに隠れていた蒼汰朗に声を掛けた。

「蒼汰朗君、あの雪だるま、作ったの？」

東が腰をかがめて蒼汰朗に声を掛けた。

蒼汰朗は恥ずかしそうに笑顔で頷うなずいた。

「もう終わりましたか？」

芳は二人に声を掛けた。

「うん、打ち合わせはほぼ終わったよ」

「じゃあ、休憩してください」

芳は二人の湯飲みを引き、テーブルの上にコーヒーとケーキを運んだ。

「うわー、おいしそうなモンブラン。あつ、でもまた太らないかしら」

「じゃあ、やめとく？」

大地が茶化した。

「いえ、大丈夫です、覚悟して頂きます」

東が相好を崩しながら言った。

「あのおー、この言葉、いいですね。施した恩は忘れてしまえ。受けた恩は忘れるな」。

…その通りだなあ」

東がサイドボードの上にある日めくりの『大本み教えカレンダー・こころの鏡』を見ながら、しみじみと言った。

「東先生は、この言葉…、お好きですか？」

芳が訊いた。

「はい、実は私の地元では、この言葉を実践した先人たちがいたんです。その人たちは、私たちの誇りでもあるんです」

「そうなんですか、それって、いったいどんなことですか？」

「お話ししてもいいですか？」

「ぜひ、聞かせてください」

芳が答え、大地も頷いた。うなず

では…、と前置きして、東が語り始めた。

「芳さん、イライラ戦争ってご存じですか？」

「イライラ…戦争？」

芳が首をかしげた。

「正確には、イラン・イラク戦争です。第一次湾岸戦争とも言われた、中東のイランとイラクの間で起こった戦争なんです」

「それなら聞いたことあるけど…」

「一九八〇年（昭和五十五）から八年間も続いたので、なかなか終わらない戦争に対して、両国の名前をもじって、日本ではイライラ戦争とも呼ばれたようなんです」

「なるほど、そういうことですか」

「その戦争の最中に起こった出来事なのですが…」

東は戦時下でのある出来事をかいつまんで説明した。

イラン・イラク戦争は、開戦から五年後の一九八五年の三月に入ると情勢が一気に悪化。イラン国内で日本人が多く住んでいた地域も空爆されるようになった。

そして三月十七日、イラクのサダム・フセイン大統領が「四十八時間の猶予期限以降、イラン上空を飛ぶ航空機は民間機であっても、無差別に攻撃する」と宣言した。これを受け、イラン在住の外国人は一律に命の危険を感じ、一斉に国外に脱出。当時、多くの日本人も出国を試みたが、各国の航空会社は自国民を優先して搭乗させていたため、日本人はチケットを持っていても飛行機に乗ることができず、イランを出国できない状況となっていた。

現地の日本大使館からは日本政府に対して、民間航空機派遣の要請がなされたが、乗務員の安全が確保できないなどの理由から見送られていた。三月十九日、二百人あまりの日本人は、テヘランのメヘラバード空港に取り残され、望みを絶たれた彼らは絶望的な気持ちに包まれていた。

そこに救いの手を差し伸べてくれたのがトルコ共和国だった。二機のトルコ航空機が空港に降り立ち、タイムリミット直前で、日本人全員を救出し、トルコまで送り届

けてくれたのだ。

当時、テヘランには多くのトルコ人も住んでいて、約六百人のトルコ人が空港で待機していた。だが、彼らは航空機一機を日本人に譲り、多くは陸路で避難をしてくれたのだった。

「…でも、トルコ政府が日本人のために、どうしてそこまでしてくれたのか、日本政府もマスコミもまったく分からずにいたんですね。すると後日、駐日トルコ大使からコメントが発表されたんです。『私たちはエルトゥールル号の借りを返しただけです』と…」

東が力を込めて言った。

「エ、エルトゥールル号…?」

芳が確かめるように復唱した。

「ご存じないですか?」

「ええ、でも奇跡的なお話ですね」

芳がうなず頷きながら言った。

「僕は聞いたことあるなあ。確か昔、和歌山であつたトルコ船の海難事故じゃなかつ

た？ あつ、そういえば、東先生は和歌山出身だったよね」

「さすが先輩！ 私は本州最南端の串本くしもと町生まれです。で、その事故が起きたのが、串本の紀伊大島という島の沖合だったんです…」

東は「エルトゥールル号海難事故」について、熱く語り始めた。

今から百三十年以上前の話である。

一八八七年（明治二十）、小松宮彰仁親王殿下・同妃殿下一行が、イスタンブールを訪問したことの答礼として、当時のオスマン・トルコ帝国は、軍艦エルトゥールル号を使つて、日本への初の親善使節団・六百五十人余を派遣することになった。

使節団は一八八九年（明治二十二）七月十四日、イスタンブールを出港したが、エルトゥールル号はこの時すでに建造後二十六年を経た木造の老朽艦だったため、長期の航海に耐えうるか疑問視されていた。

幸いにも翌一八九〇年（明治二十三）六月七日、予定より遅れ、十一月の船旅の末、なんとか横浜港に入港。一行は国賓として熱烈な歓迎を受け、明治天皇にも謁見した。

三カ月後の九月十五日、使節団は台風が接近しているにもかかわらず横浜港を出港し、帰路に就いた。しかし翌十六日夜、エルトゥールル号は台風の直撃を受け、現在

の和歌山県串本町の檜野^{かし}埼^{のさき}沖で座礁。あえなく大破し沈没してしまった。この事故で、荒れ狂う海に投げ出された乗組員のうち、五百八十七人が命を落とす大惨事となった。

この時、島民たちは荒れる岩場の河岸^{かし}から生存していた乗組員を総出で救助。負傷した六十九人の看護に不眠不休で尽力し、非常用食料や自らの衣服を惜しげもなく提供した。島民の真心を尽くした献身的な姿は、言葉の通じないトルコ人たちの心を打った。

翌年一月、日本の軍艦二隻で無事祖国まで送られたトルコ人たちは、この大恩を忘れることなく、子に、そして孫にと、この史実を語り継いできた。小学校の授業でも教えられていて、トルコ人なら知らない人はいないという実話である。トルコが親日国である理由もここに端を発しているのである。

「串本で生まれた私は、エルトゥールル号事件を学校で教わっていましたし、祖母からも聞いていました。祖母もまた先人から伝え聞いていたようです。でも島民たちは、そのことを自慢するようなことはしなかったそうです。祖母は時々、〃人にしてもらったことは忘れてはいけないよ、でも、人にしたことは忘れなさい〃と言っていました」
「だから、この言葉が心に響いたんだね」

大地がカレンダーを見ながら言った。

「そうなんです。事故の後、トルコからの“治療費の請求をするように”との連絡に對しても、島民たちは『はじめから請求するつもりはない。そんなお金があるなら遭難者の義援金に充ててください』と断ったそうです。この大事故は、その後日本ではあまり知られることはなかったのですが、九十五年がたつて、広く認知されることになったんです」

東が言葉に力を込めた。

「なるほど、それがトルコによるイランからの日本人救出劇だったわけですね」

「はい、私たちの先人が取った善意の行動が時を越えて、多くの日本人を救うことにつながったんです。当時救出された日本人が、航空機のキャビンアテンダントに、『いつ爆撃されるかも分からないのに、よく助けに来てくださいました』とお礼を言うのと、そのアテンダントは『昔、トルコ人は日本人に助けられました。日本人を助けるために、この仕事に携われたことを私たちは誇りに思います』と胸を張っていたそうです」

「なんと、感動的なお話ですね」

芳はしみじみと言った。

「この二つの実話は六年前（二〇一五年）に日本・トルコ合作の『海難1890』と

「この映画にもなっているんですよ。雨宮先生、これはお薦めですよ」

「そんな映画があるんだね。ぜひ見てみたいな。それにしても、トルコの人たちは、素晴らしい国民だね」

大地はそう言って、日めぐりカレンダーに目をやり、もう一度、尊師さまのお示しをかみしめるように言葉に出した。

施した恩は忘れてしまえ。

受けた恩は忘れるな。

(続く)